

秋山虔・木村正中・清水好子 編

講座
源氏物語の世界

第五集
少女卷～真木柱卷

虔・木村正中・清水好子編

有斐閣

源氏物語の世界

第五集

少女巻／真木柱巻

編者紹介

秋山 虔 (東京大学文学部教授)

木村正中 (学習院大学文学部教授)

清水好子 (関西大学文学部教授)

講座 源氏物語の世界〈第五集〉

昭和56年8月20日 初版第1刷印刷

定価 2,000 円

昭和56年8月30日 初版第1刷発行

編者 秋山 虔
木村 正 中
清水 好 子

発行者 江 草 忠 允

発行所 株式会社 有 斐 閣

東京都千代田区神田神保町2~17

電話 東京 (264) 1 3 1 1 (大代表)

郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番

本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前

京都支店 [606] 左京区田中門前町 44

印刷 株式会社 精興社・製本 株式会社 高陽堂

© 1981, 秋山虔・木村正中・清水好子. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

1393-071050-8611

はしがり

『源氏物語』は、『万葉集』と並んで、日本人の心の中に、永く生きつづけ、近代の文学にも大きな影響を与えている古典中の古典である。まさに日本人の心の故郷ともいべき世界がここにある。

さて、その『源氏物語』の研究も、平安時代以来長い伝統をもち、その積み重ねの上に、今日では多彩をきわめており、なお、つねに新しい課題が取り出されて、尽きることがない。すなわち、成立論・構想論、あるいは作品成立の歴史的背景の解明や準拠論、作品の内在的展開に重点を置いた主題論・構造論、さらに表現論・文体論、とくに「語り」や草子地の問題、また作品に内包される諸種の思想の追究、王権論・神話的構造論など。それは、この作品がもつ無尽蔵の内在的意義と、複雑な機構を考えれば当然であろう。

一方、このような作品総体を対象とする研究とともに、注釈的研究の発展も著しい。注釈的研究は、もはや単なる平板な訓詁の学で終わることができない段階に達しており、叙述に正確に即しながら、個々の部分に内蔵される文学的意味を明らかにしていく方法が要請されているのである。こうした、各巻の内部からの問題点の把握が、作品の総体的な考究と深くかわりあっていることはいうまでもない。つまり、『源氏物語』の個々の局面の「読み」の中から導き出された視点を、作品総体との連関において確認し、それによって『源氏物語』の展開をいっそう明確に跡づける、——こうした反復作業が『源氏物語』の理解をさらに深めていくわけである。『源氏物語』を「読む」とは、要するに、

さまざまな視点からの作品分析を相互に媒介させながら、いま読みつつある部分に内在する特有な作品論的意義を具体的に明らかにし、『源氏物語』の本質に近づいていくということなのであろう。

この『講座 源氏物語の世界』は、右のような『源氏物語』の「読み」を実現したものである。巻の順序に一応従い、その巻をめぐって存在する主な「テーマ」を取り出した。それらは、巻固有の場面的ないし巻論的な方向、他の巻と密接に関連していく構想論的方向、時には全体にかかわる美意識の問題などの考究として、また物語に外在する背景的な諸要件をその基盤として捉えることによって問題を明らかにしていく方向へと、それぞれの「テーマ」の性格に応じた方法をもって究明されている。これらの「テーマ」の追求が、『源氏物語』とは何かの問いにこたえ、さらに、この物語を読むための具体的な手がかりともなれば、まことに幸いである。

なお、「テーマ」は、従来の研究の達成の中から、編者三人が設定し、それにもとづいて、数多くの執筆者に自由に論究していただいた。また、各集には、『源氏物語』に深い関心をもっておられる方々に、より広い角度からのエッセイを寄せていただいた。これらの方々の御協力に深く感謝する次第である。また、いろいろとお世話になった有斐閣編集部の澤井洋紀・林喜代子両氏に厚く感謝の意を表したい。

編者 秋山 虔

木村 正中

清水 好子

執筆者紹介 (執筆順)

の野増武の野長石森池室山針小鷺藤稲鈴三原沢後榎の篠
ぐち口田原村谷川原本田井賀木谷田藤本原
もと元繁原精政昭本和信正中照茂貞敬日出邦敦正祥正昭
ひろ大お夫弘一春平茂臣助裕行彦雄和じ二男明子子子純じ二私)
とら寺田孝男

文部省主任教科書調査官
大阪市立大学文学部助教授
梅光女学院大学短期大学部教授
山梨大学教育学部教授
東横学園女子短期大学助教授
帝京大学文学部助教授
香川大学教育学部教授
茨城大学人文学部助教授
跡見学園女子大学文学部教授
関東学院大学文学部教授
昭和女子大学短期大学部講師
東京学芸大学教育学部助教授
静岡女子大学文学部助教授
東京学芸大学教育学部助教授
広島大学文学部教授
成城大学文芸学部助教授
横浜市立大学文理学部助教授
大阪成蹊女子短期大学助教授
静岡英和女学院短期大学助教授
日本女子大学文学部助教授
武庫川女子大学文学部助教授
東京大学教養学部教授

文芸評論家
青山学院大学文学部教授
文芸評論家

目次

〔少女巻〕

1 夕霧元服と光源氏の教育観

野口 元大 1

光源氏の「心掙」 光源氏の意図
政教主義 紫式部の教育観

源家百年の計

夕霧の昇進コース

光源氏の

〔少女巻〕

2 大学寮

増田 繁夫 11

夕霧の大学入学
たち

文章生夕霧

紫式部の時代の大学寮

『源氏物語』の時代の学者

〔少女巻〕

3 夕霧の幼な恋

武原 弘 21

「幼心地」に芽生えた恋 内大臣（頭中将）の怒り
氏と頭中将の関係 襖越しの求愛 最後の対面 幼な恋の作品内的意味
内大臣（頭中将）の人格 源

〔少女巻〕

4 六条院の四季の町

野村 精一 36

『源氏物語』構想論における六条院

フォークロアの観点による六条院論

コスモロ

ジイの表現としての六条院構想 六条院世界における「自然」と「人間」
と竜宮伝承 六条院の構造をめぐる諸論点

明石物語

〔玉鬘巻〕

5 さすらいの女君

長谷川 政春 48

「飽かざりし夕顔」のゆかり——玉鬘の登場 主題としての「さすらい」
下向か 玉鬘の異常性——その愛着・結婚、また仮想の「かたは」性・鄙性 なぜ筑紫
りの〈場〉 「ことさらに徒歩より……」 忌み籠

〔玉鬘巻〕

6 大夫の監

石原 昭平 59

野鄙と権勢 源泉は『宇津保物語』滋野真首か 真首、御春の物質主義と大夫の監
「わが君をば、後の位に」

〔玉鬘巻〕

7 初瀬詣

森 本 茂 72

夕顔物語から玉鬘物語へ 玉鬘の初瀬詣 椿市での劇的なめぐり合い
と右近の役割 長谷観音と靈驗譚 玉鬘の初瀬詣の類話

西京の乳母

8 玉鬘十帖の成立

池田 和臣 83

玉鬘系十六帖一括後記挿入の説をめぐる
の成立 玉鬘十帖後記挿入をめぐる
説ふたび 玉鬘十帖の位置づけ
「並び」の巻と成立論 玉鬘十帖後記挿入

〔初音巻〕

9	六条院の春——初音巻の方法	室伏 信助	96
---	---------------	-------	----

「生ける仏の御国」 表現の特性の意味するもの(1)——調和の世界 表現の特性の意味するもの(2)——光源氏の視点 初音巻と行事と

10	六条院と年中行事	山中 裕	106
----	----------	------	-----

序——年中行事の盛儀 初音巻(1)——六条院の春、元日の行事 初音巻(2)——男踏歌の意義 胡蝶巻——春秋の美 螢巻——五月五日の行事と花散里 野分巻——野分による六条院の動揺 行幸巻——大原野行幸、裳着 真木柱巻——ふたたび男踏歌、源氏不参加 梅枝・藤裏葉巻の華美な行事

11	春秋争い	針本 正行	120
----	------	-------	-----

春秋争いの意味 薄雲巻の春秋の定め 少女巻の春秋論 胡蝶巻の春秋争い 春秋争いの結末

12	光源氏と玉鬘(1)	小町谷 照彦	131
----	-----------	--------	-----

夕顔の露のゆかり 心尽くさするくさはひ 山吹の花の細長

13	螢兵部卿宮	鷺山 茂雄	147
----	-------	-------	-----

玉鬘十帖と螢巻 螢巻の位置と構造 『源氏物語』の兵部卿宮 玉鬘の懸想人螢兵部卿宮 兵部卿宮、螢火に玉鬘を見る 『源氏物語』の世界——その非現実の現実 螢

兵部卿宮のその後

〔壁巻〕

14 物語論

藤井 貞和

160

『物語論』の限定 起源論としての『物語論』の特質 「兩夜のしな定め」の延長
「菩提と煩惱との隔たり」

15 近江の君登場

稻賀 敬二

170

「落葉」を拾う人々 近江の君と末摘花と 内大臣の期待 近江の君の役割——内
大臣・源氏の反発関係の側面 近江の君の性格と環境 人に笑われる和歌と文 付
録的な影像部分

16 内大臣（頭中將）論

鈴木日出男

184

斎宮女御立后と内大臣 弘徽殿女御、雲居雁と内大臣 玉鬘の六条院入り 玉鬘と
内大臣 内大臣の源氏との和解

17 光源氏と玉鬘 (2)

小町谷照彦

201

親がりはつまじき御心 根深くうゑし竹の子 橘のかをりし袖 親にそむける子
絶えせぬ炎

〔野分巻〕

18 夕霧垣間見

三谷 邦明

221

〈屍姦〉Ⅱ〈視姦〉説 六条院物語の崩壊 視線人物としての夕霧 禁忌の違犯

〈見る人〉夕霧 〈視線〉の動き 幻視の眼差し

19 野分の美 原田 敦子 235

「野分」の語 文学作品に現われた「野分」の推移 「枕草子」の野分 「源氏物語」の野分 野分巻の台風と長保五年の台風

〔行幸巻〕

20 大原野の行幸 沢田 正子 251

今様の姫君 夢物語の余香として 母のゆかりに 永遠の思慕と夢 大原野の行幸の準拠

21 尚侍玉鬘 後藤 祥子 263

宮仕え志向 尚侍の地位 「おほぞうの宮仕」 逆転劇

22 鬚黒大将 榎本 正純 276

求婚譚と鬚黒大将 「まめ人」 鬚黒大将の登場 行幸・藤袴巻の鬚黒大将——作者の意図の再構成 (1) 鬚黒大将の造型と意義——作者の意図の再構成 (2)

23 式部卿宮家 篠原 昭二 289

玉鬘と鬚黒——事件の波紋 式部卿宮と式部卿宮家 光源氏と式部卿宮家 六条院と式部卿宮家

24 光源氏と玉鬘 (3) 小町谷 照彦 304

八重山吹の夕映え

あかねさす光

渡り川の契り

言はでぞ恋ふる

〈源氏物語と私〉

『イリアス』と並ぶ

寺田

透

323

紫式部とラ・ファイエット夫人——饗庭孝男

325

『講座 源氏物語の世界』（全九集）総目次〔巻末〕

テキスト対照表〔巻末〕

凡例

- (一) 『源氏物語』の原文引用のテキストは特定せず、各執筆者の判断によっています。なお、漢字、仮名づかい、句読点等で、必ずしもテキスト通りでないばあいがあります。
- (二) 主なテキストの略号は次のとおりです。
- 『全集』——日本古典全集（阿部秋生・秋山虔・今井源衛 校注・訳、小学館）
- 『全書』——日本古典全書（池田亀鑑 校註、朝日新聞社、現行版による）
- 『大系』——日本古典文学大系（山岸徳平 校注、岩波書店）
- 『集成』——新潮日本古典集成（石田穠二・清水好子 校注、新潮社、刊行中）
- (三) 巻末に右の四テキストの頁対照表を付しました。
- (四) 各章（「テーマ」）で使したテキストは、章ごとに記してあります。
- (五) 原文の漢字は、原則として新字体によっています。
- (六) 原文のふり仮名は、歴史的仮名づかいになっています。
- (七) 原文中の（「」）内は、当該の章の執筆者による補注です。
- (八) 各章のタイトル脇に、『源氏物語』の当該の巻名を付しました。巻名のない章は、『源氏物語』中のいくつかの巻にわたる「テーマ」、または、美意識の問題等、全巻にかかわる「テーマ」です。

1 夕霧元服と光源氏の教育観

野口 元大

光源氏の「心掟」

物語が少女巻に入ると、作者の筆はとみに収束への傾きを強めるようである。光源氏は今や内大臣として、太政大臣をも目前に、政界にゆるぎない安定をもたらしている。そうした現在に立って彼は慎重に次の代への思いをめぐらす。長男の夕霧が元服の年齢を迎えたのである。

時の第一人者の嫡男である以上、元服と同時に彼は四位に叙せられるというのが世の常識であり、また光源氏の意向でもあったはずである。

ところが元服した夕霧が叙せられたのは六位であった。實際上貴族社会の最下位である。本人もちろんだが、亡き母葵^{あおい}の上に代わって彼を今日まで育ててきた祖母大宮の驚きと不満は、直接光源氏へ抗議せずには収まらぬほどのものであった。それに対して、源氏はこう答えている。



ただ今かうあながちにしも、まだきに生おひつかすまじうはべれど、思ふやうはべりて、大学の道にしばし習はさむの本意ほんいはべるにより、いま二三年をいたづらの年に思ひなして、おのづから朝廷てうていにも仕うまつりぬべきほどにならば、いま人となりはべりなむ。みづからは九重ここのへの中に生ひ出ではべりて、世の中のありさまも知りはべらず。夜昼よるひる御前にさぶらひて、わづかになむはかなき書ふみなども習ひはべりし。ただかしこき御手より伝へはべりしだに、何事も広き心を知らぬほどは、文の才ざえをまねぶにも、琴笛の調べにも、音たへず及ばぬところの多くなむはべりける。はかなき親に賢き子の勝るためしは、いと難かたきことになむはべれば、まして次々伝はりつつ隔たりゆかむほどの行く先、いとうしろめたなきによりなむ、思ひたまへ掟おきてではべる。(少女、『全集』(3)一五―六頁。以下、原文引用は『全集』による)

さらに言葉が続けてこうも言う。権門の栄華におごった心には、苦しい学問の道など自分には不必要と思え、気ままな戯れ遊びばかりが好ましくなり、またそれで世の中が通りもするのだが、いったん時勢が変わり家運が衰えてくれば、人の侮蔑にあってもうどうにも対抗するすべがないことになる。そして、

なほ才ざえをもととしてこそ、大和魂やまとたましひの世に用ゐらるる方も強うはべらめ。さし当りては心もとなきやうにはべれども、つひの世の重しとなるべき心おきてを習ひなば、はべらずなりなむ後のちもうし

ろやすかるべきによりなむ。(少女、一六頁)

と結論するのである。

光源氏の意図

右のような光源氏の言説は、従来『源氏物語』の、あるいは紫式部の教育観としてつねに引用され、論議の焦点とされることが多かった。しかしこれを物語の文脈の中に置いて一読すれば明らかのように、あくまでこれは源家の嫡男夕霧という特別な立場にある人物のための特殊な教育の必要を説いた言葉なのである。この点については、玉上琢彌氏の『源氏物語評釈』に適確な読みが示されている。

夕霧は数え年で一二歳、現在なら小学校六年生になったばかりである。何も無理をして今年元服させなくても、と祖母はじめ皆思うところであろう。光源氏の元服は同じ一二歳であったが(桐壺、(1)一二頁)、それは昔のこと、また左大臣家の葵の上との結婚問題など別の事情もあった。後の薫の元服は一四歳、匂宮は一五歳である。二、三年早いのはたしかだが、その二、三年の差を利用して大学の教育を受けさせようというのである。他家の公達^{きんだち}が元服し任官する年ごろには、夕霧も同じく任官するのだが、その時にはすでに大学の課程を修了したという別格の履歴をつけておこうという計画である。そうすればその別格の履歴に対してはまた他と異なった処遇も可能となるはずである。「いま人となりはべりなむ」という言い方は単なる未来の推量のようにであるが、発言者が政界随一の権力者であることを思えば、これは明瞭な意志の表明でもある。

光源氏自身はそうした教育は受けなかった。宮廷内の家庭教育、父帝の直接の教えを受けたのであった。帝ご自身の教育ということになれば誰もあえて批評がましいことは言わない。一世の源氏に対する帝の殊遇も問題にはなるまい。しかし、夕霧の場合にこれはあてはまらないのである。源氏の見るところ、夕霧にはどうも天才的資質は乏しい。だが母に似てかまじめで素直な勤勉さがある。それを十分に生かすには、この途が最善であらう。

もう一つ。物語の本文には明言されていないが、夕霧が自分より下臈げろうと思いおとしていた（一七頁）藤家の従兄たちがすでに任官し、加階しているという事実がある。やがて次代には、夕霧の源家に対抗する、藤家の大勢力を形成すべき人々である。光源氏自身も藤家の勢力を抑えるのにさまざまな苦心を払い手段をめぐらしてきた。夕霧にとって競争はいよいよ激烈に、対応すべき策はさらに限定されてくる。そのためにこそ、この教育が、夕霧のために、必要になってくるのだ、という高橋和夫氏の指摘は正確である（「乙女」『源氏物語講座』第三卷、昭46）。

源家百年の計

元服した夕霧はやがて字あざなをつける儀式や大学寮はかせの博士・助教に入学の礼をすませ、そのまま二条東院に学問所を設けて勉学に精進する生活に入る。孫を溺愛する祖母のもとへは月に三度ほどしか出入を許されないという厳しさである。不平や愚痴もないではないが、「おほかたの人柄まめやかに、あだめきたるところなくおはす」（二二頁）根がまじめな夕霧であるだけに、連日精励し、わずか四、五ヵ月で『史記』一三〇巻を読み上げたという。